

発達障害を考える

慶應義塾大学
医学部小児科専任講師
渡辺 久子 氏

—発達障害のある子どもの育ちと子育てについて—

慶應義塾大学
医学部小児科専任講師
渡辺 久子 氏

当センターでは、発達障害理解のための講演会を平成21年度より開催しています。今回は、小児精神科医として長く乳幼児精神保健に携わっていらっしゃる渡辺久子氏をお招きし、講演をして頂きました。当日は大勢の参加者で、会場も熱気がありますが、お話を内容を紹介します。

今日は、今まで出会った発達障害の子どもたちが、私に教えてくれたことを中心に、子どもの発達、人間の心についてのお話をしたいと思います。

カイロスの時間が心をつくる

アスペルガー症候群のA君は、海外旅行の度に私に絵ハガキをくれます。それは30年以上前、彼が大変な思いをしていたとき、私が真心込めて「大丈夫ですか」と言つたことが彼の心の忘れぬ瞬間となり、私を彼の「良い人」リストの中に入れてくれたからなんですね。

A君は仕事をしていて、「ボーナスの使い方がわからない」と言つたので、「旅行したら? 外国は空気が違うよ」とすすめました。そうしたら「先生、本当に空気が違う、本当に気持ちが良い。日本の大好きで、本当に楽だ」と帰つてきました。彼の大好きな世界は電車であり、かつ良い人間のコレクション。その二つを組み合わせた世界を彼は旅して

いく。そして、そこで良い人達に出会つて良い顔で帰つてきます。

彼はすぐ世界が広い。こういう幸せな気持ち、幸せな思いをカイロスと言います。そしてこれが心をつくらんです。

ギリシア語では時間に「種類の概念があります。一つは今が何年の何月何日の何時という皆で共有し、生活、社会を作つていく上で必要なクロノスの時間。共有できて効率が良くて、そして今や世界中で一緒に時

じています。私はよく海外で、日本文化の中には4つのSがあるとお話しします。簡素||「シンプル」、ささやか||「スマート」、物静か||「サイレント」。それから、ゆっくり||「スロー」です。これはまた命の本質を表します。本当に命の営みは、気が遠くなるような営みです。日本には育てにくい、育ちにくい仲間がいるときの包み方が本来あった。今の日本はちょっとでもダメだったらダメっていう厳しさがある。

でもやっぱり、私は自分の故郷の日本をA君の言つ空氣の「気持ちの良い」空氣が「柔らかい」場所にしたいと思うんですね。世田谷区は是非目指して下さい。発達障害のお子さんや、重度心身症のお子さんが

間ね。もう一つの時間、カイロスはその人だけの時間。その人が全身全霊で輝く、1分2分では測れない永遠の時間です。

診察を続けて39年になりますが、競争主義、効率主義、そういうものが徘徊して日本を壊していくと感じています。私はよく海外で、日本文化の中には4つのSがあるとお話しします。簡素||「シンプル」、ささやか||「スマート」、物静か||「サイレント」。それから、ゆっくり||「スロー」です。これはまた命の本質を表します。本当に命の営みは、気が遠くなるような営みです。日本には育てにくい、育ちにくい仲間がいるときの包み方が本来あった。今の日本はちょっとでもダメだったらダメっていう厳しさがある。

でもやっぱり、私は自分の故郷の日本をA君の言つ空氣の「気持ちの良い」空氣が「柔らかい」場所にしたいと思うんですね。世田谷区は是非目指して下さい。発達障害のお子さんや、重度心身症のお子さんが

普通の自分、普通の感覚の大切さ

子どもは、大体3歳くらいまでの時期の身体記憶がどう貯まるかで発達が決まってしまうということがあるんですね。後輩の小児科医が福島県郡山市では絶対に震災後のトラウマの子どもは出したくないというので「今この当事者であるあなた達が一番得意ですぐ出来ることをやれ

ば良いのよ。ところでの地域は子どもを喜ばせるのに何が得意なの?」って言つたら、「絵本」だと。外部の人の言うことを聞くのではなく、自分たちの地域にあつたやり方で子どもに普通の自分、普通の感覚を取り戻すことができました。なぜ、絵本の読み聞かせが始まり、そして子どもとお母さんが安心して過ごせる場所ができるのです。

こういうことをお話しするかといふと、子どもはいつ何時何に出会い方で守られる場所があるか、その配慮を一番先にしてくれるかどうかで体験が育ちの肥やしになるか、壊すものになるかの明暗が分かれかかるなんですね。

良い抱き癖は、脳の発達を促す

赤ちゃんの脳みそはお豆腐のように柔らかくて、髄液の中に浮かんでいて、さらに頭蓋骨、そしてさらに羊水に包まれ、子宮の壁に包まれています。また社会が妊娠さんだと守つていいくつなり赤ちゃんの命は何重にも守られ、抱き癖が付いて生まれてくるわけです。この良い抱き癖は、何を促すかと私は羊水を母性、子宮を父性だと思います。そして日本ほど、

父性が弱くなつた国はありません。父性が母と子という柔らかい命を守る、胎児のときから安心して過ごせるような、そういう社会を作りたいのです。乳児期、思春期を通して、羊水のような温かく包むものと、しっかりと守りが必要です。母性と父性があつて、初めて命を守れるのです。

羊水のような柔らかさで包む

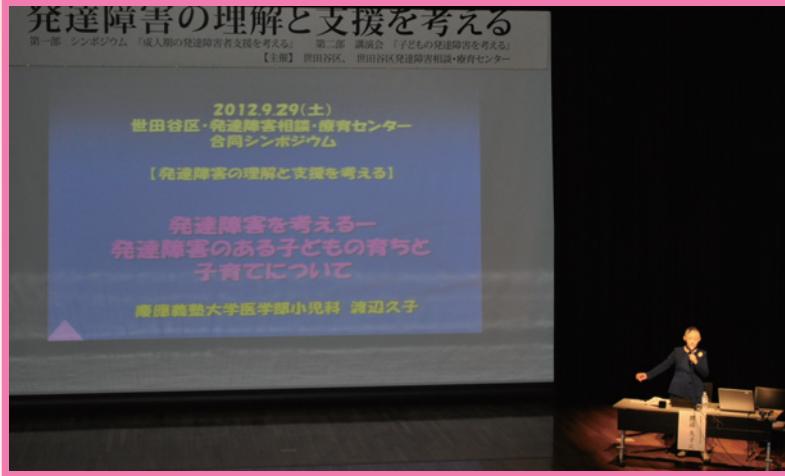
間主観性のお話をしましょ。実は赤ちゃんの脳には相手の心の奥、相手の意図を見抜く力がある。一方で、お母さんの声は赤ちゃんの脳を自然に刺激するようになっていて、お母さんの「おはよう」に、阿吽の呼吸で響き合つてお互いの脳が発達していきます。

しかし、間主観性の発達不全がある広汎性発達障害の子どもは、そういうやりとりのところがすこく難しくて、頑張つてもうまくいかなくて本当に疲れ果ててしまします。厳密にはいろいろな要因が重なつている可能性もありますが、エネルギーを使い果たして一次的な障害を起こすと、育ちがだんだん逸れていってしまつ。だから、時間を充分にかけ、そしてしっかりと暖かく包むことが必要なです。羊水のような柔らかさと、それからこの範囲でやれば大丈夫といふことです。

現在の研究では、子どもが感じる「良い人」というのは血のつながりでも、子どもを一生見ていけるのはお父さんとお母さんでしょ。だから、周囲が気を付けて、「私達はこんなふうにするけれども、それはお父さんとお母さんと一緒にやつているんだよ」とチームであります。

いくことが大事です。そこには保育園とか地域とかも絶対に必要ですね。今、特に若い真面目なお母さん達が、周りに応援してもらえる環境がなくプレッシャーを感じています。「羊水の加減」で、いいのいいの、それがいいの、大丈夫大丈夫つていふのが、一番良い応援なんですね。

発達障害の子が何を感じているかを考えながら、その子が社会で尊重され、その子らしく生きるために、本当に良い出会いのカイロスを日々心がける。それがとても大切だと思



へにつっこり笑える社会は、私達全ての人間にとつて良い社会です。この子達は力ナリヤ、社会に毒つ気があるとピーピーと教えてくれます。

父性が弱くなつた国はありません。父性が母と子という柔らかい命を守る、胎児のときから安心して過ごせるような、そういう社会を作りたいのです。乳児期、思春期を通して、羊水のような温かく包むものと、しっかりと守りが必要です。母性と父性があつて、初めて命を守れるのです。

チームワークで親を支える

現在の研究では、子どもが感じる「良い人」というのは血のつながりでも、子どもを一生見ていけるのはお父さんとお母さんでしょ。だから、周囲が気を付けて、「私達はこんなふうにするけれども、それはお父さんとお母さんと一緒にやつているんだよ」とチームであります。

本当に良い出会いのカイロスを日々心がける。それがとても大切だと思

います。(終)

(文責・世田谷区発達障害相談・療育センター)



当センターでは、発達障害理解のための講演会を平成21年度より開催しています。今日は、小児精神科医として長く乳幼児精神保健に携わつていらっしゃる渡辺久子氏をお招きし、講演をして頂きました。当日は大勢の参加者で、会場も熱気がありますが、お話を内容を紹介します。